

## 96. 野洲町小篠原大岩山の 一古墳調査概要

野洲町小篠原大岩山は明治14年に銅鐸14個、さらに昭和37年の東海道新幹線建設工事に伴う採土作業中に銅鐸10個が出土したことで著名な場所である。またこの付近には、従来大岩山・天王山と称されてきた、粘土槨形式と思われる二つの古墳や、家形石棺を納め国の史跡に指定されている円山、甲山両古墳を始め多くの古墳が存在する。前記2基の粘土槨墳は梅原末治博士によって報告されており、<sup>①</sup>これによれば、大岩山古墳では5面、天王山古墳では2面の古鏡を出しており、ここより約1km北西にある野洲町富波の古富波山古墳等とともに、この地の竪穴式古墳に関する知識を得る重要な遺跡である。また、横穴式石室を持つ古墳については、国道8号線の建設工事に伴い、辻町の宮山古墳が京都大学によって調査された。<sup>②</sup>その後、滋賀県教育委員会によって、辻町の宮山2号墳が調査され、小篠原の細谷山古墳の調査も行われた。しかし、この二古墳についてはその正式報告書は出されていない。この小文で報告を行う古墳は、県教育委員会が調査した宮山2号墳と細谷山古墳の間にある古墳で、昭和42年に調査を行ったのであるが、その後報告の機を失って今日に至ったものである。

この付近は東海道新幹線の建設に伴う採土作業の後にも採土が続き、その地形はすっかり変わってしまった。この採土作業により当古墳の崩壊が懸念されるに至り、このことを知った県教育委員会の手で急ぎ調査が行われることとなった。古墳の向かって左側の側壁は、写



古墳側壁露出の状況

真でも見られるとおり、それを覆う土砂が削り取られてすっかり露出し、何らかの力が加われば、簡単に崩壊する可能性が強くなった状態のもとでの調査であるため、玄室内部の精査と石室の実測を出来る限り早く行うこととし、崩壊に対し絶えず注意を払いつつ、調査が実施された。調査は県教育委員会の依頼により、田中政三・田中喜太郎両氏の協力を得て、西田が事に当り、昭和42年8月19日より始めて同月28日に終わっている。羨道部は既に無くなっており、玄室内に土砂が流入していたため、まずその排出から始めることとした。以下に作業日誌の概要を記して調査の経過に代えたい。

8月19日(土) 玄室内に流入の土砂の除去作業を行なう。午後、大津市立皇子山中学校教諭宮嶋菅雄氏が調査に加わる。流入土砂中に後世土器片を採集。

8月20日(日) 玄室底を精査。平安時代に属する土器片を少量発見。周辺地域の調査も行なう。前日に続き午後、宮嶋氏参加。

8月21日(月) 他の行事のため作業中止。

8月22日(火) 午後降雨のため作業午前中。玄室内各部の写真撮影を行なう。

8月23日(水) 平面実測図を作成。終了後、側壁実測のため準備を行なう。

8月24日(木) 奥壁及び両側壁実測図作成。

8月25日(金) すべての側壁の実測終了。中心縦断面作製。実測終了後、室底下の状況調査のため、縦横のトレンチを掘ったところ、約10cm下にさらに一層を発見。調査開始。

8月26日(土) 他の行事のため作業中止。

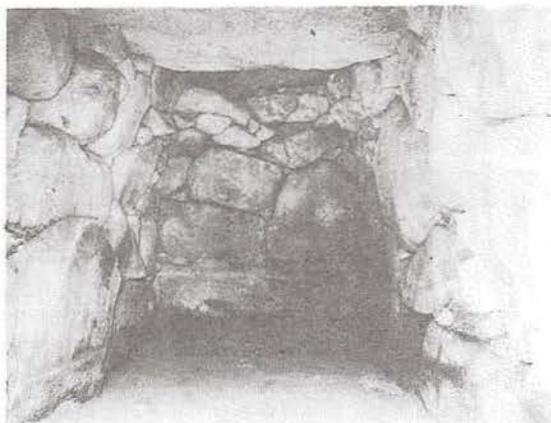
8月27日(日) 室内調査すべて完了。

8月28日(月) 午後、福谷修氏による写真撮影。

なお、この古墳はその後、集中豪雨による土砂流出のため崩壊してしまい、現在は墳丘そのものも削平されている。

### 石室の状況

羨道部は大部分が欠失している。現存部で幅約1m 60cm、高さも約1m 60cmをはかる。玄室の幅は奥壁部で約2m 25cm、玄門部で2m 20cm、長さは4m 70cm、両袖式で、両袖部はともに約30cmと比較的小さい。高さは奥壁部で2m 70cm、玄門部で2m 50cm、天井石は



玄室内の状況（奥壁部）

三石で、奥に向かって高くなっている。室底も奥に向かってやや上り気味である。奥壁は大石1個を最下段に据え、その上に比較的大振りの石3個で中段を作り、最上段の天井石との間は比較的小さな石を積んでいる。奥壁の向かって右側は垂直に近く、左側は約40cmせり出しており、中央部ではその出は30cmばかりである。両側壁はともに約1m60cmあたりからやや前方にせり出して天井石を受けている。両側壁ともに大石で最下段を整え、上段はやや小さくなる。

このような石室の作り方は、琵琶湖対岸の大津市北郊の横穴式石室の作り方と明瞭な相違が見られる。即ち大津市北郊では、室底が正方形に近く、側壁や前後壁が大きくせり出して、天井石は比較的小さな石が一石か二石であり、石の積み方も下段が比較的小さな石を、中段に大石を用い、隅の上段では、側壁と奥壁にまたがる形で石が積まれている例が多い。これに対しこの地域では、この古墳に見られるように、底面長方形で持送りが少なく、天井石は大石を並べており、奥壁の最下段には大石が据えられ、他の壁も最下段は他に比して大ぶりの石を積んでいるのが多い。この石室の構築法は、大津市北郊の場合が特殊なもので、野洲付近の方が普遍的と言うべきである。

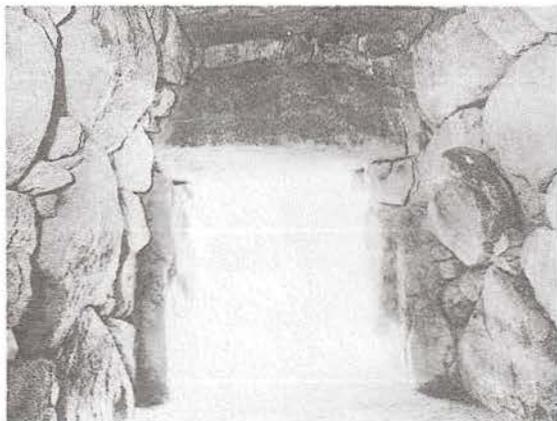
#### 余 録

この石室では底面に注意すべきものがあり、それに関連してすこし述べておこう。流入の土砂は入口に多く奥壁部では少なかったが、これを取り除くと、一応室底と思われる面が検出された。ところが、この面では平安時代に属すると思われる少量の土器片が発見されただけであった。従って、この古墳は平安時代に既に盗掘を受けて遺物を残さないものと思い、実測等の作業を行ったのである。実測終了後、底面下における排水等の施設の有無を調べるため小トレンチを掘り出したところ、この面より約10cm下にさらに1面のあることが判明した。そこでこの面を精査したところ、古

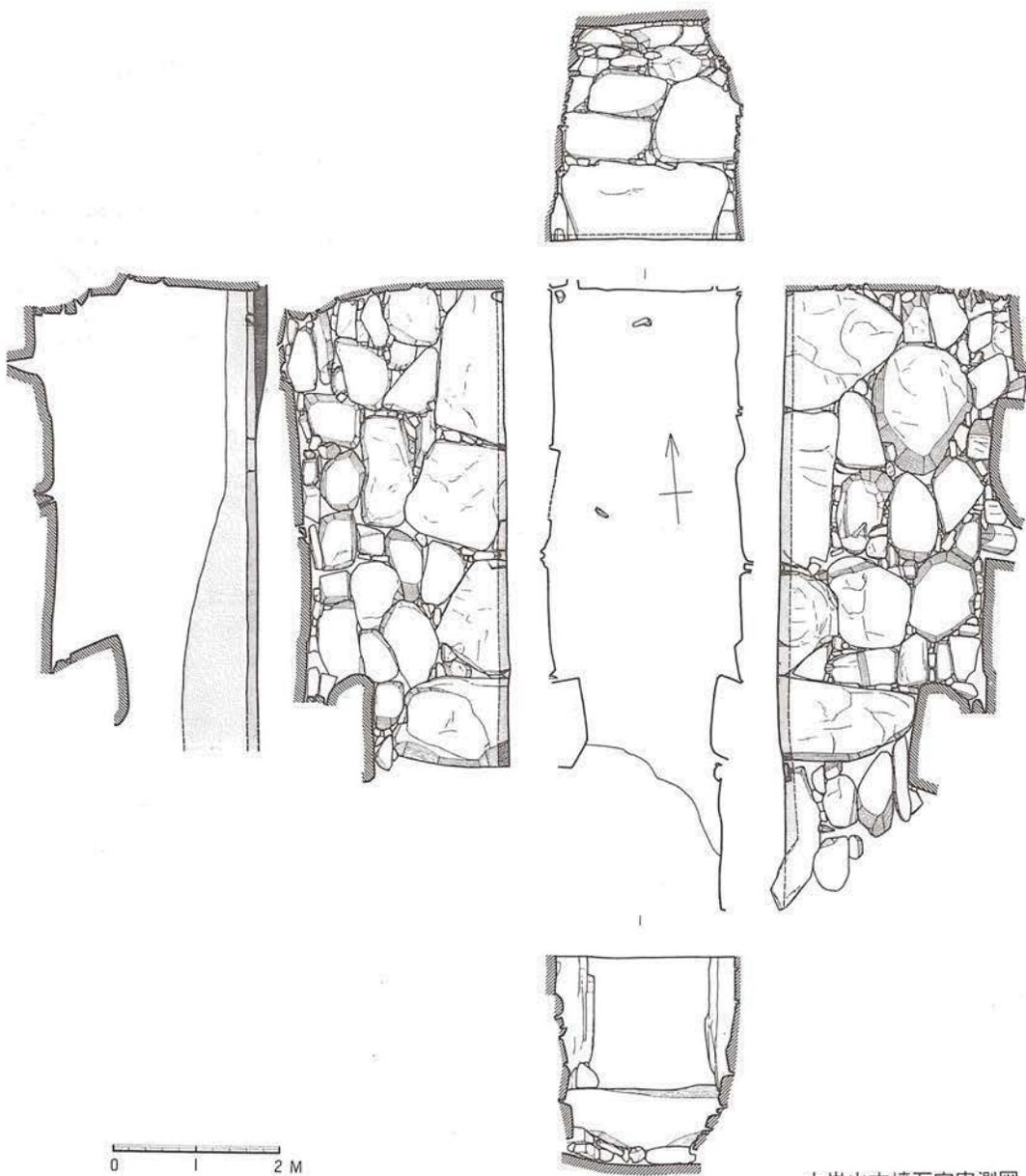
墳時代の須恵器片を見出したのである。従って、この下の面が本来の古墳面であり、上の面は平安時代に作られた面であるとするべきであろう。なお、この平安時代の面の室中央部に近く一つの小土壇が掘られていた。ところが、このような現象と符合する古伝承が思い合わされるのである。それは、今昔物語巻第二十八「近江国篠原入墓穴男語第四十四」で、語られる話である。ここでは近江国篠原の古墳が美濃への旅人の雨宿りや野宿の場となっている。これによって平安時代に石室がこのような形で雨宿りや野宿の場に利用されたことが窺えるのである。この石室において最初の本来の室底の上に第二次面があり、土器からみてこれが平安時代のものであることは、今昔物語の説話と比較して興味深いものである。もちろん、この古墳が今昔物語で述べられたものであるとするのではないが、後世において古墳が説話で述べられたような形で利用されたことを傍証するものと言えよう。

#### 考 察

当古墳の規模は前述の通りであるが、羨道部が崩壊してしまった段階での調査であるため、その全容を明らかにすることができず、かつ崩壊の恐れのある状況のため、古墳築造の詳細を知るための石室外部の調査は不可能であったので、極めて不十分な結果しか得られなかった。これは可能な範囲の調査を、でき得る限りの短日時に行うという変則的な調査では止むを得ないことであった。そのうえ僅かの出土遺物が現在その所在が不明で、資料として記載できず、この点も残念である。しかし、この古墳の玄室規模から見て、この地の群集墳中でも規模の大きなものと言えよう。この地は古代野洲川三角洲に君臨したと考えられる近淡海安国造の主要な奥津城の場である。古富波山古墳を含めた小篠原・辻町の古式古墳や、三上山麓及びその周辺に分布する後期群集墳、神体山三上山を中心とした祭祀遺跡は、近淡海安国造に関する古代伝承と共に論



玄室内の状況（両袖部）



大岩山古墳石室実測図

すべき多くの問題を持っている。これは銅鐸24個出土という事実によってさらに重要性を加えるのである。最近野洲町各地で圃場整備や土地開発に伴う調査が数多くなされ、その結果についても、報告書の公刊や現地説明会の開催などによって報告され、この地の弥生時代から古墳時代にかけての解明に大きく貢献している。さらに、守山市や中主町でも服部遺跡をはじめ、数々の調査が行われており、特に守山市服部で発見され大規模な調査が行われた弥生時代から歴史時代にかけての複合遺跡については、現在その出土土器の整理研究が行われている段階で、その詳細な報告は後日を

待たなければならないが、現在までに判明しているだけでも種々の重要な事実が明らかになりつつある<sup>③</sup>。

今後、当地出土の銅鐸に関する研究調査の結果が発表され、服部遺跡の詳細が報告され、また、後期群集墳についてより深い解明がなされれば、平地における弥生時代から古墳時代にかけての集落の姿の解明と相まってこの地の古代の姿はより明らかになることと思われる。その時、今は無きこの古墳の資料が何らかの役に立つならばと思ひ、手許にある不備な資料ではあるが、取りあえず公表する次第である。

終りに、現地調査に御協力をいただいた宮嶋菅雄・

田中政三・田中喜太郎の三氏、写真撮影を担当していただいた福谷修氏、今回の公表に際し古墳石室の実測図を作製していただいた岡本隆子氏に厚く御礼申し上げます。(西田 弘)

(註)

- ① 梅原末治 近江国野洲郡小篠原大岩山の一古墳調査報告 考古学雑誌12-1  
梅原末治 栗太・野洲両郡に於ける二三の古式墳墓の調査報告 考古学雑誌12-2・3
- ② 金閃忽・小野山節 滋賀県野洲郡祇王村宮山古墳発掘調査概報 史林36-2
- ③ 服部遺跡に関しては次の概報が公刊されている。  
太橋信弥・山崎秀二・谷口徹・辻広志 服部遺跡発掘調査概報

なお、野洲町をはじめ守山市・中主町の調査の結果に関しては、県の文化財調査年報やほ場整備事業関係遺跡調査報告。また、県や野洲町・守山市各教育委員会で発行したそれぞれの遺跡の調査報告でその詳細が報告されているが、その数も多いので、ここでは一々の書名を挙げないことをお許し願いたい。

## 97. 滋賀県下の古墳 出土鏡について(補遺)

先に近江風土記の丘資料館発行の図録「近江の銅鐸と銅鏡」に関連して、県下の古墳出土鏡に関する概要を、この「滋賀文化財だより」のNo.51、52、53の3号にわたって述べたのであるが、その後二三訂正や増補すべき点が生じたので、この紙幅を借りて述べることにする。

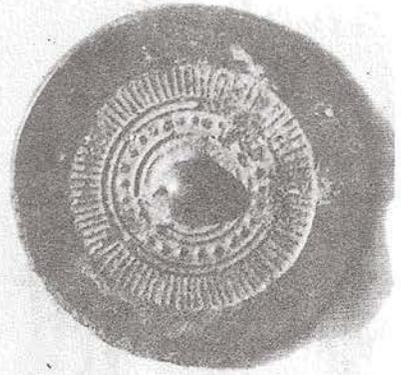
### 1. 彦根市正法寺町出土鏡

これについてはNo.53の追記で取りあえず鏡出土の記録のあることを述べておいた。その後彦根市の久保田弥一郎氏をわずらわし、記録にあらわれる鈴木久治郎氏及び地元へ保管されたと見られる鏡等の調査をお願いしたのであるが、結局現物を明らかにすることができなかった。従って、現在では東京国立博物館の文献以上に出ることはできず、鏡の種類や大きさ等は一切不明である。

### 2. 守山市金ヶ森出土鏡

守山市金ヶ森の西村吾一氏が所蔵しておられる小形の仿製珠文鏡である。この鏡については以前から知られていたようであるが、拙文が契機となり、丸山竜平、山崎秀二両氏からその存在を知らされたのである。さらに丸山氏からはその写真も頂戴した。ただ、鏡の大きさや出土日時等に関する正確なことは不明で、機会を得て調査をしたいと思っている。山崎氏によると、

出土した場所の近くには古墳があるが、この鏡は古墳から出土したのではないようである。なお、伴出遺物として壺があるとのことであるが、この壺の性格等



守山市金ヶ森出土鏡(丸山竜平氏写真)も不明である。従って、現段階では取あえずその事実を報告しておきたい。守山市からは、服部遺跡の内行花文鏡といい、この鏡といい、古墳以外の場所から小形仿製鏡が出土していることは注意すべきことである。

### 3. 水口町泉塚の越古墳出土鏡

近江風土記の丘資料館発行の図録では「水口町波濤平古墳出土」とされているが、これは誤伝のようである。また、同図録で舶載鏡となっているので、拙文でも一応舶載鏡と図録の意見を伝えておいたが、図録を見られた各氏の御意見でも仿製鏡とされており、仿製鏡と訂正しておきたい。

### 4. 野洲町古富波山古墳出土鏡

拙文「滋賀文化財だより」No.52の古富波山古墳出土鏡の説明において、東京国立博物館所蔵の四神二獸鏡の同范鏡について述べるのを忘れていた。従って、このことを追記しておきたい。小林行雄氏の「三角縁神獸鏡の研究」(古墳文化論考所収)によれば、この四神二獸鏡に関しては、その同范鏡として京都府の椋井大塚山古墳出土鏡中の銘帯小片を挙げておられる。

### 5. 野洲町大塚山南遺跡出土鏡

これは昭和40年刊の滋賀県遺跡目録によって一応その項目を作ったのであるが、その詳細は不明であった。ところが、昭和55年刊の滋賀県遺跡目録ではこの項が掲載されていないので、古鏡出土遺跡からこの項は外すべきであると思われる。従って、兵主大社所蔵鏡の出土地ではとの推測も取り消すこととなる。なお、この兵主大社所蔵鏡の出土地については、滋賀県教育委員会文化財保護課の大橋信弥氏が、辻町の大塚山古墳よりはもう少し山よりの道路工事の際発見されたいということまで追跡しておられる。

彦根市正法寺出土鏡及び守山市金ヶ森出土鏡の調査に当り、彦根市久保田弥一郎氏、滋賀県教委丸山竜平氏、守山市教委山崎秀二氏に種々御高配をいただいた。記して謝意を表わしたい。(西田 弘)